

Steel 鉄の点景 Landscape

十手といえば捕物帳、という連想は今日のわれわれにとってはごくあたりまえのものになっている。その背景にあるのは、さまざまに創作されてきた時代小説や時代劇だろう。だが実はこれらのフィクションが、いわゆる現実の「十手持ち」のイメージを大きく歪めているという。武器であると同時に鉄製の身分証として使われてきた十手というものに目を向けつつ、現実と虚構の狭間に思いを馳せてみよう。



手前から真鍮製丸形十手（長28.5cm）、鉄製丸形十手（長38cm）、如意十手（長37.7cm）、無鉤十手（長30.7cm）、鉄製六角十手（長37cm）（明治大学刑事博物館蔵）。

創作によって歪められた十手持ちの実態

十手というと、いわゆる捕物といわれる時代劇の中では、御馴染みとっていい存在だが、日本刀や甲冑などの伝統的な武具の類と比べると、体系だった研究がなされていないようである。

十手には棒身が鉄製のものと真鍮製のものがあるが、数の点からは鉄のものが多そうだ。以前、刀の鐔を取り上げた時に、「鉄味」（鉄肌のもつ豊かな風合い）というものに注目をしたが、十手の場合も愛好家の間ではやはり「鉄味」が吟味され、飾り金具などの造嵌などが、鑑賞のポイントになっており、その辺りは共通の価値観が通用している。

十手は、与力、同心、目明しといった司法警察権にかかわるいわゆる町方のほか、地方の藩の役人なども持ったとされて

いる。やはり身分の上で上位に立つ与力、同心の持ち物が凝った造りのものが多いのに対し、目明しや岡っ引き用のものは鉄だけでつくられた装飾のないシンプルなもの（愛好家の間では目明し十手などと呼ばれる）が多いようだ。

十手は罪人の捕縛の際の武器として使われた以外に、時代劇でも扱われているように今日の警察手帳のような身分証、権力代行者のシンボルとしての機能も備えていたことはいうまでもあるまい。ただし現代の探偵小説などでも、現実にはありえないような誇張が多用されているように、捕物帳の世界でもやはり実態からかなり外れた描写が多いことも現実のようだ。

たとえば「美人の女房持ちの岡っ引きが子分を引き連れてお上から預かった十手を振るう」などという物語設定は、お江戸のヒーローものとしてなかばパターン化している感があるが、これなどは、相当にムリをした物語設定の代表だという。



打払い十手（長82.5cm）と呼子
笛。打払い十手は、相手が刀など
の凶器を持つ場合に、たたき落と
すことができるよう、長いリーチで
つくられている（明治大学刑事博
物館蔵）。



朱房付き十手
（東京都江戸東京博物館蔵）。

目明し、岡っ引きはむしろ与太者だった

町方の中で士族としての身分が与えられていたのは与力までであり、同心はいわば与力の雑務を処理する補佐役だったわけだが、目明し、岡っ引きとなるとこれは公認の幕吏でさえなかった。むしろ同心の使い走りというのに近く、生活もその日暮らしのような者が多かったらしいというのだ。給金はきわめて少ないか、ない場合も多かった。

給金がないのになぜ同心の下働きをしたかといえば、方々を小器用に回って歩きながら、けっこう小銭を受け取ったり、付け届けを手に入れたりといった「たかり」に近いような形で、小遣い銭を手に入れていることができたからだという。いわゆる喋報者としてお上への「つげ口」を質に、小遣いをせびるわけだ。

「御用聞き」の中には大親分といわれるような者もいたが、料理屋や寄席などの商売をしながら、子分といわれる連中と同心との間をとりもってやるというような存在だったらしい。正義の岡っ引きの親分が悪人相手に太刀まわりを演ずるなどというのは、やはり大衆娯楽向けに演出されたフィクションといえそうだ。今日の推理ものでいえば猫や犬が名探偵を演じるくらいに現実味が薄い話でさえあるかもしれない。

幕府の立場からは「正式には存在していない」はずの目明し、岡っ引きが、十手を預かるというようなことはもちろんな

く、必要に応じて同心から借り受けるというのが、一般的だった。小遣い銭がなくなると、十手を借り出して、地まわりをして歩くなどというケースもけっして少なくなかったようだ。こうした目明し、岡っ引きの性質から、「公威をかりて市民の煩をなす」といった弊害も多く、目明し、岡っ引きを廃止すべしという令の類も何度かにわたって出されているようである。

近年、総会屋問題がクローズ・アップされたことがあったが、「ゴロを巻かない」かわりにいくらかのものをもらおうという文化は、案外、こうしたお江戸の風習に根を持っているのかもしれない。

目明し、岡っ引きは町の与太者に近いが、八丁堀の与力や同心にしても、出入りの大名や町家があって、そこからかなりの金品を受け取っていたということだから、こうした風習は、当時はむしろ当たり前の事だったのかもしれない。現在の倫理観で断ずるわけにいかないことはもちろんだが、少なくとも勧善懲悪の時代劇が、理想化された特殊な虚構の世界のお話であるということはいえそうだ。

リアリズムというのは、味けなくもあり、また興味深くもある。

参考文献：
「与力・同心・目明しの生活」横倉辰次著 雄山閣
「明治大学刑事博物館資料図録 十手・捕物」
「江戸の十手コレクション」井出正信著 里文出版

〔写真提供：明治大学刑事博物館、東京都江戸東京博物館〕